

# アメリカの大学スポーツにおける外国人選手の台頭

—— 『高等教育クロニクル』の記事より ——

宮 田 実 (訳)

“The New Face of College Sports”

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

## 増加する外国人選手

「ニーハオ」これは中国語で「こんにちは」という意味である。ジョン・カリパリ氏はメンフィス大学では初めてとなる中国人バスケットボール選手勧誘キャンペーンについて尋ねられると「ニーハオ」と挨拶する。タイガーズ(メンフィス大学)の監督として8年目のシーズンを迎えるカリパリ氏は毎日30分、中国人コーチから中国語を学んでいる。2008年春には北京を訪れる予定である。彼は中国人選手がアメリカでプレーできるよう中国政府に働きかけるつもりである。彼は、「私は中国のバスケットボール選手を獲得したいのです。」と言う。

これまで数十年間にわたって大学スポーツの監督たちはチームのために最高の選手を外国に求めてきた。長年にわたってトッププレーヤーが多数いるメンフィス大学でこのような勧誘が行われているということは、アメリカの大学スポーツの世界では外国人選手の獲得が当たり前になっているということである。

多くのスポーツ競技のI部リーグではこの十年間で外国人選手の割合が2倍になった。テニスでは2005-6年シーズンで男子選手の30%が外国人選手だった。男子アイスホッケーでは23%、女子ゴルフでは14%、スキーでは13%、男子サッカーでは10%であった。数字はこれほど高くはないがバスケットボール、体操、水泳、トラック競技では外国人選手の

割合は増加している。チームによってはすべて外国人選手というところもある。

選手たちは世界中からやってくる。多いのはアフリカ、オーストラリア、ヨーロッパ、南米の国々である。アメリカに選手を送っていない国を見つけるのが難しいというのが現状である。

## NCAAの対応

監督たちは、アメリカには優秀な選手が十分いないから外国に目を向けざるを得ないのだと言う。自ら外国へ行く監督もいればスカウト部門を活用する監督もいる。しかし現在ではインターネットのおかげで大学のオフィスにしながらスカウト活動ができる。また各種のスポーツアカデミーの増加によって若い外国人選手が来るようになり、スカウトしやすくなっている。

しかし監督の中にはアメリカの大学スポーツチームがあまりにも外国人選手に頼りすぎており、その結果、素質のあるアメリカ人選手を締め出し、奨学金を受けるチャンスを奪っていると主張する者もいる。アメリカ水泳連盟のチャック・ウィールガス常任理事は「大学が外国人選手に奨学金を与えるたびにアメリカ人選手への奨学金が減るのです。」と言う。

外国人選手の増加によってNCAA（全米大学体育協会）は彼らの適格性を審査するようになった。昨年秋、同協会は外国人選手を審査するために情報センターを設立し、外国人選手がプロとみなされる収入を得ていないことを確認している。この新しい試みは論議を呼んでいる。監督たちは面倒だと言い、スポーツ局の役員たちは効果的でないと言う。

1つ断言できることは、今後外国人選手が増え続けるということである。アメリカ人と外国人選手に奨学金獲得の手助けをするコンサルティング会社「スポーツ選手のための奨学金」のロス・グリーンスタイン社長は次のように予測する。「外国人選手は増え続け、ついには彼らがチームの多数派になるでしょう。」

## 勝つための方策

1960年代および1970年代に、アメリカの大学スポーツ、特にテニスや陸上競技の分野に外国人選手が数多く入ってきた。例えば、1940年から1970年にかけてテニスの男子シングルの優勝者のうち8人が外国人選手であったが、現在では、I部リーグの上位125人のシングルス選手の約半数が外国人選手である。

なぜこのような状況になってきたのか。答えは簡単である。勝たなければならないから

である。大学のスポーツ部の幹部たちは全国レベルの試合に勝つことによって生活の糧を得ている。そのために彼らは監督にできる限り才能のある選手を獲得するようプレッシャーをかけることになる。その選手の出身地がマサチューセッツであってもムンバイであってもかまわないのである。

監督たちは最も優れたアメリカ人選手を獲得しようとするが、アメリカのトッププレーヤーたちには大学からの獲得の申し出が殺到する。ゴルフ、テニス、サッカー界では優秀な選手は高校を卒業すると同時にプロになるケースが増えている。その結果、大学に来るアメリカ人選手が不足することになる。現在I部リーグには約6000のチームがあるが、すべてのチームが優秀なアメリカ人選手を獲得することはできないのである。

アラバマ大学男子テニス部のビリー・ペイト監督は次のように言う。「アメリカの高校テニス界で強い影響力を持つ選手は40～50人くらいしかいません。デューク大学やスタンフォード大学が最優秀選手を獲得した後では外国人選手を探すしかないのです。」アラバマ大学では12人の選手のうち6人が外国人選手である。

一方、外国人選手たちはこれまで以上にアメリカの大学に入学したいと思っている。彼らは、アメリカは勉強とスポーツを同時にできる唯一の国であると考えている。アメリカ以外の国ではスポーツ選手は高等教育を受けるか、プロとしてスポーツの世界に入るか選択しなければならない。また、アマチュア選手はアメリカの大学にあるようなハイレベルな指導、トレーニング施設、競争に恵まれないのである。

これまで選手獲得のためにリトアニア、ハンガリー、スロベニアを訪れたことのあるアメリカン大学の男子バスケットボール部のジェフ・ジョーンズ監督は次のように言う。「東ヨーロッパの多くの国では経済状態が良くないので大学進学が難しいのです。だから、彼らはアメリカの大学に来ることができ、とても感謝しています。1日3度の食事ができ、快適な寮に住み、バスケットボールができ、しかも授業料が無料ですから。」

外国のスポーツ組織や監督たちは、以前は自国の優秀な選手を外国に出したくなかったが、今では自国の選手を積極的にアメリカに送り出している。このような変化が起こった理由として、アメリカの大学が世界に通用する選手を育ててきたこと、アメリカのスポーツ施設が充実していること、監督たちが外国人コーチと良い人間関係を築いてきた事が挙げられる。

現在では外国のスポーツ関係者が自国のトッププレーヤーの行き先を決めるためにアメリカの大学を見学するのはよくあることである。ゴルフのスウェーデン代表チームのピーター・スヴァリン監督は秋にミネソタ大学を訪れた。そこで彼はミネソタ大学のコーチ陣に会い、スウェーデン人最優秀若手プレーヤーの一人の活躍ぶりを確認し、同大学の改装

されたスポーツ施設を高く評価した。スウェーデンはこれまで数多くの天才ゴルファーを輩出してきた。その中の一人ビクター・アルムストルム選手は現在ミネソタ大学の3年生で全米代表選手である。彼はミネソタ大学チームをI部リーグに昇格させたのである。

大勢の外国人選手の獲得によってアメリカの監督たちは、低迷していた大学スポーツ界を生き返らせることができたのである。そして敗者から勝者へ変わったのである。9年前カリフォルニア大学サンタバーバラ校の男子サッカーチームは2勝17敗でI部リーグの最下位に近いところにいた。その頃、ティム・ヴォム・ステীগ監督はニュージーランドの17歳以下のチームが、絶対優位だったアメリカチームに対してもう少しのところまで勝った試合を見た。その時のことを思い出して彼はこう言う。「もし私のチームにニュージーランドチームのバックラインが入ってくれたらすぐに勝ち続けられるのにと私は言いました。」その夢は実現しなかった。しかし、ヴォム・ステীগ監督は優秀な選手を外国に求めた。ニュージーランド、ガーナ、カナダ、イングランド、ジャマイカ、アイルランド、メキシコを訪れ精鋭の選手を獲得した。そして2006年彼のチームは全米選手権を獲得した。その時の先発メンバーはほぼ半数が外国人選手であった。

トゥレイン大学女子ゴルフ部前監督のスー・バウアーさんはすべてアメリカ人で構成されたチームにしたかった。しかし、彼女はこう言う。「問題は、入部希望の学生は私だけでなく35人の他大学の監督にも同じような熱烈な手紙を書いているんです。」そこでバウアーさんは、卓越した選手に対する大学からの奨学金の可能性をちらつかせて世界中のスポーツ関係団体に電子メールを送り始めた。彼女はその当時のことを思い出してこう言う。「基本的にお金はかかりませんと書きました。ゴルフボールをまっすぐに打てて、75以下でまわれたら是非うちの大学に来てくださいと。私はすべての大陸にコンタクトをとり最終的に我がチームを全米トップ10に引き上げました。」バウアーさんは2005年に監督を辞め、トゥレイン大学のスポーツ副局長になった。

大学スポーツにおける以上のような成功例はたくさんある。南メソジスト大学の女子水泳部は外国人選手を多数獲得して、過去10年間全米で20位以内に入っている。今年は20人の選手のうち9人が外国人である。カリフォルニア州にあるセントメアリーズ大学の男子バスケットボール部は4人のオーストラリア人学生のおかげで今シーズン全米25位以内に入った。アリゾナ州立大学の女子ゴルフ部では先発選手5人のうち4人が外国人であり、それぞれアルゼンチン、コロンビア、スペイン、スウェーデン出身である。同部は過去3シーズン全米でトップ10入りしており、15回連続NCAAトーナメントに出場している。メリッサ・ルーレン監督は次のように言う。「アメリカ以外の国に生まれたというだけの理由で卓越した選手を受け入れないなんてできません。」

## 多様な外国人選手獲得法

アメリカ人監督にとって外国人選手を探す最良の方法は、現地に出向いて実際に彼らがプレーするのを見ることである。外国人選手の中にはアメリカに行く前に監督に会いたいと思う者もある。メキシコで生まれノースウェスタン大学とトゥレイン大学でゴルフをしていたリリア・アルヴァレスさんは次のように言う。「監督に直接会って、自分が友好的で異文化に溶け込めることを示さなければなりません。」

精力的に外国にスカウトに出かける監督もいる。外国人選手の活躍で全国レベルのスポーツクラブを持つベイラー大学男子バスケットボール部のスコット・デュルー監督はこう言う。「私のチームはリトアニア、クロアチア、フィンランド、ラトヴィア、チェコそれにアフリカから学生を獲得しました。私はそれらの国々のほとんどすべてを訪れました。」しかし、すべての大学がスカウトのために1500ドルの航空運賃を出せるわけではない。そのような大学はスカウトサービス、DVD、インターネット、口コミを利用する。ロブ・マース氏はヨーロッパ、アフリカそしてアジアで、主としてプロのバスケットボールのスカウトサービスの会社を運営している。彼はそれだけではなく有望な大学生選手に関するレポートを発行している。大学は年450ドルでそのレポートを購入することができる。彼は各選手の体格、長所と短所、試合運び、協調性などをリストアップする。彼はこれまでにベイラー、アメリカン、ゴンサガ、ネヴァダ大学ラスヴェガス校などの大学にレポートを送った実績を持つ。

これとは違ったスカウトサービスもある。ダン・アロノビッチ氏はコンサルティング会社「スポーツ選手のための奨学金」に勤務し、イスラエルで仕事をしている。彼は有望な選手に対し行きたい大学を決める手助けをし、アメリカの監督へのコンタクトの取り方を教える。彼はSAT（アメリカの大学進学適性テスト）の会場へ出向き、受験しているイスラエル人学生たちにチラシを配る。その内容は、スポーツに秀でていれば無料でアメリカの大学教育を受けるチャンスがあるというものである。過去2年間で彼は水泳選手と体操選手の2人をオハイオ州立大学へ、1人の体操選手をペンシルバニア州立大学へ、1人のテニス選手をメアリーランド大学へ進む手助けをした。

アメリカのスポーツアカデミーでは多くの外国人選手がアメリカの高校卒業証書を目指しながらスポーツの練習に励んでいる。このスポーツアカデミーの増加のおかげで大学の監督たちは外国に行かなくても外国人選手を探すことができるようになった。最大手のひとつIMGアカデミーでは過去10年間で在籍者数が2倍になり、現在700人以上にのぼる。その内、40%は外国人である。そこではバスケットボール、野球、ゴルフ、サッカー、テニスを教える。フロリダにある同アカデミーのテッド・ミックマ校長は次のように言う。「わ

がアカデミーは外国人選手たちにとって、大学に行くまでにアメリカの環境に順応する最適な場所なんです。彼らはここを卒業する時にはすでにアメリカの大学へ行く用意ができているのです。」

IMGアカデミーの年間学費2万5千ドルやスカウトサービスの料金を払えない外国人選手は直接監督に電話をしたりメールを送ったりする。多くの監督がここ数年間でこのような電話が急激に増えていると言う。10年前サウスキャロライナ大学の男子サッカー部のマーク・バーソン監督は外国人選手から1週間に1通のペースで手紙を受け取っていたが、今では1日に2～3通の電子メールが送られてくる。

時には交換留学制度がいい結果を生み出すことがある。1990年代の中頃、メキシコからの高校生交換学生を受け入れていたミネソタ州のホストファミリーがその学生の姉のビデオテープをミネソタ大学体操部の監督に送った。メグ・スティーブンソン監督は2週間そのテープに目もくれなかったが、それを見た時、感動したのである。ジュディス・カヴァソスはメキシコ代表として6回世界選手権に出場し、1991年に優勝した選手だった。ミネソタ大学は彼女を迎え入れ、1997年彼女は1年生としてチームを初めての全米選手権出場に導いたのである。現在ミネソタ大学にはカヴァソス選手の後継者的な存在である若いメキシコ人体操選手が在籍している。

シド・カルヴァルホ監督率いるウインスロップ大学の男子テニス部は長年にわたって監督の出身国であるブラジルから選手を迎え入れている。彼は次のように言う。「1人の選手が入部します。彼には友達があります。その友達が入部するとまた別の選手が入部することになります。」

## 扱いやすい外国人選手

大学スポーツの監督たちは外国人選手を気に入っている。なぜなら彼らはチームを強くするだけでなく、コーチしやすいからである。ほとんどの外国人選手は最高の施設で練習したことがなく、そのような恵まれた機会に感謝している。彼らはスポーツと勉強に集中し、アメリカ人選手より指導しやすい。対照的にアメリカ人選手は温室の花のように扱う親の保護の元、一流の施設で競争して育ってきた。外国人選手はホームシックになることもあるが、多くの選手は分別があり、生活態度も良好である。もしそうでなかったら厳しい結果が待ち受けている。奨学金やアメリカでの教育を受ける機会を失うだけでなく、アメリカに滞在することができなくなるのである。

外国人選手は大学における学生の多様性にも貢献している。マーケット大学法科大学院スポーツ法学科長のマット・ミトゥン教授は次のように言う。「外国人選手を迎えるとい

うことは同じ国からの非スポーツ学生の獲得につながるんです。」

監督や学者の中には、外国人選手の流入を制限することは不公平だと言う人もいる。それはまた連邦の差別禁止法に違反すると言う。テニスをするためにギリシャからステットソン大学に留学し、昨夏オーバリン大学女子テニス部の監督になったコンスタンティン・アナニアディスさんはこう言う。「外国人選手にはアメリカ人選手と同じように競争する機会が与えられるべきです。この国は誰にでもチャンスを与える国じゃないんですか。」

しかし少数だが監督や学者の中には、大学が外国人選手を獲得して損をするのはアメリカ人選手だと主張する人がいる。もし奨学金が1人の外国人選手に与えられると1人のアメリカ人選手がそれを受けられなくなる。コロラド大学陸上競技部のマーク・ウェットモア監督もその1人である。彼はもし外国人選手を獲得すれば競技会でもっと勝てるということを知っているが、彼はそうしない。彼は次のように言う。「州立大学としてわれわれはコロラド州とアメリカの納税者に対して彼らの子息が最優先されることを明確にする責任があります。次のような状況を考えてみてください。もしコロラド州、メイン州、フロリダ州などで18年間納税した後、あなたの娘が砲丸を42フィート投げられるのに、アイスランド出身の誰かが43フィート投げられるという理由でその州立大学があなたの娘にスポーツ奨学金を出せないとしたらどう思いますか。」

デューク大学でスポーツ法学を担当するポール・ハーゲン教授はこう問いかける。「直接税金を払っている人々に恩恵を与えないスポーツ奨学金の目的とは一体何ですか。」彼は更にこう言う。「大学は成績優秀な外国人留学生を迎えて教学のレベルを上げることができるでしょう。北京のエリート高校から多数の学生を受け入れれば化学部門の賞をもっとたくさん取れるでしょう。しかし、われわれはそういうことをしません。」

メンフィス大学バスケットボール部のカリパリ監督は、中国人選手ばかりのチームにはしたくないと思っている。プロになれそうな選手が1人いればいいと考える。先月ニューヨークで開催されたスポーツビジネス会議でカリパリ氏は200人のスポーツ関係者にメンフィス大学の中国人選手獲得戦略について話した。もし彼が中国人バスケットボール選手を獲得し始めたら他の大学も追随するだろうと言った。そしてこれまで中国でテレビ放送をしたことがないNCAAは、もしメンフィス大学が中国人選手を獲得すれば、中国の放送局からかなりの放送権料が見込めるだろう。カリパリ氏は中国政府についてこう言う。「もしわれわれが中国政府の若い選手の育成方法を変えられることができれば、われわれにとって大きなメリットとなります。」ところでカリパリ氏は中国人選手を獲得できた時に何と言えればいいか知っている。それは中国語で「ありがとう」を意味する「シェーシェー」である。

(2008年1月11日号)

(Copyright 2008, *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission. The complete English-language version of this article is available on *The Chronicle of Higher Education* Website at: <http://chronicle.com>)

## 訳者あとがき

本稿は、アメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はロビン・ウィルソンとブラッド・ウォルヴァートソンの両氏である。

今回取り上げたのは、アメリカの大学スポーツ界で起こっている外国人選手獲得に関する記事である。アメリカのプロスポーツの世界では、外国人選手の獲得は日常茶飯事である。日本からも野球の大リーグ入りを果たす選手は年々増加している。世界中から実力のある選手がプロスポーツに挑戦している。

大学スポーツはアマチュアスポーツであるが、同時に大学にとってはビッグビジネスでもある。大学の名声を高めるために勝てるチーム作りが求められる。アメリカはもともと世界中からの移民から成る国であるから外国人の流入に対しては寛容な面があると思われる。しかし、外国人選手の割合があまり高くなりすぎると反発が出るのもうなずける。

日本では受け入れ留学生30万人計画が発表されたが、スポーツとの強い関連性はあまり見られない。アメリカで今後増え続ける外国人選手に対してNCAAがどのような新たな方策をとるのか注目したい。